

日本人の言語行動パターン

－ウチ・ソト・ヨソ意識－

三宅 和子

要 旨

本稿は日本人の人間関係や言語行動を支配する社会・文化的特徴を考える枠組みとして、ウチ・ソト・ヨソの概念を提唱する。ヨソとは自己とはふだん関係がないがなんらかのきっかけで一時的に関係をもつ種類の間がある領域である。ヨソのカテゴリーは従来の「内」・「外」の枠組みからの分析や日本人の人格構造の考察のなかでは注意が払われなかった。本稿はこのカテゴリーが日本人の言語行動を考える上で重要であることを明らかにした上で、自己対ヨソのインターアクションがどのようになっているかを研究するための方法論を考える。

〔キーワード〕 社会, 文化, ウチ・ソト・ヨソ, 自己, 親疎

Patterns of Japanese Linguistic Behaviour:

uchi, soto and *yoso* as a conceptual framework

Miyake, Kazuko

This paper proposes the concepts of *uchi*, *soto* and *yoso* as a framework to understand the socio-cultural features that govern Japanese interpersonal relationships and the linguistic behaviour that is associated with them. The prevailing framework of *uchi-soto* does not adequately explain the contrasting ways in which Japanese are observed to relate to two groups of people outside their inner circle. One of these groups consists of people to whom a Japanese individual feels related but not particularly close. The other group consists of those people with whom the individual is occasionally and accidentally brought into contact, but there is normally no relationship at all. The former group is called *soto* in this paper, and the latter *yoso*. This category of *yoso* has received scant attention in Japanese linguistic studies, and the author argues that studying Japanese linguistic behaviour in relation to *yoso* will lead to a better understanding of the Japanese and their language. The paper offers a summary of the characteristics of the *yoso* relationship and suggests some possible ways by which *yoso* interactions may be investigated.

1. はじめに

日本語教育における社会言語学的研究の役割は、日本人の言語行動の研究を通して、言葉が実際にどのように使われているかを究明し、教師および学習者の言語行動に対する認識を高めることにより、学習者の適切なコミュニケーション能力を育てることであろう。その研究の手段として、アンケートや面接調査などを通して大量のデータを集めたり、実際の談話を録音・録画して、数量的および質的分析が行われてきた。その結果と文法的研究を援用して、今日では実態と理論に支えられた日本語に関するより綿密な優れた情報を提供することができるようになった。しかし、社会言語学的研究はさらに、言語の「ふるまい」を究明するにとどまらず、さまざまな形で得られたデータを分析・統合して、日本人の言語行動を支配する文化・社会的思考パターン、行動パターンを探ることをその目的にしている。文化人類学、心理学などの領域で盛んに使われている「内」・「外」¹⁾の概念も、そのような日本人の社会・文化的思考パターンを考える鍵となるもののひとつであると考えられてきた。

「内」・「外」の定義は一般に、「内」の人間が「家族、自分の会社の人、自分の属するグループなど」であるのに対して「外」の人間が「親しくない人、他人、他会社の人、他グループの人など」(平林・浜 1988)と説明されている。「内」が状況によってこれよりも狭い範囲をさす場合もあるが、「外」の定義はおおむね類似している。この定義に従えば、「外」の人間は「内」以外の人間全般をさすと考えられる(図1)。

しかし、「他会社の人」や「他グループの人」などは、「他人」と同じレベルでとらえられるものであろうか。「他人」を自分とは関係のない人と解釈できるならば、後述する井出・他(1986)の言語調査などの結果をみても、日本人が「他人」に対して「他会社の人」などとは違った対応をしていることは明かである。自分あるいは「内」に関連のある「外」のグループと、関連のない「外」のグループとは、分けて考える必要がある。そこで本稿では、社会言語学的分析の枠組みとして、自己をとりまく人間層を、ウチ・ソト・ヨソに分けることを提唱する(図2)。

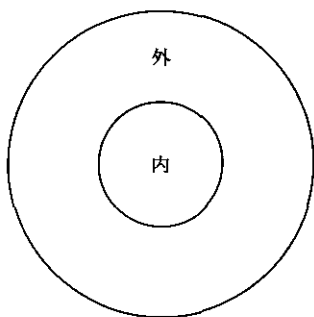


図1. 「内」・「外」モデル

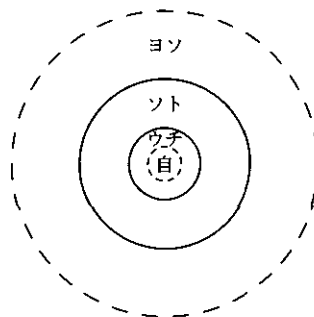


図2. ウチ・ソト・ヨソモデル

ウチの人間は自己のまわりの家族やごく親しい人々、ソトの人間はごく親しくはないが自己やウチと関連のある人々、ヨソの人間は自己やウチとは関係がないがなにかのきっかけで関係をもちえる人々（例：通行人、電車などでまわりにいる人、サービス業の人など）とする。言語行動の研究はこれまで、自己とソトの人間との相互交流を中心にすすめられてきたといえるが、ヨソの層に対する非言語行動を含む言語行動の研究は、ほとんど手がつけられていない。筆者はこれまでの調査や経験を通して、潜在的には自己と関連をもつ可能性のある人間に対して、どのような態度や言語行動をみせるかについて考察することも、日本人や日本人社会を理解する上で重要であると考えた。

本稿では自己とウチ・ソト・ヨソの関係について考察し、ヨソに対する日本人の言語行動を研究する方法について論じるが、その前に、日本人が自己と他者をどのようにとらえているかに関する先行研究を概観したい。

2. 「内」・「外」概念

「内」・「外」の二分法は、Benedict (1946)以来さかんに議論される「人情」と「義理」や「裏」と「表」、「本音」と「建前」などの概念と深く結び付いている。日本人の「自己」を考えるとき、前者の「内」、「人情」、「裏」、「本音」が自己とその周辺に関連した概念なら、後者は社会に向かって距離感や違いを意識した概念である²⁾。例えば、土居(1975)の『表と裏』はその英訳のタイトル“*The Anatomy of Self*”が示唆するように、日本人の自己が「表」と「裏」、「建前」と「本音」、「外」と「内」の二次元で表裏一体の関係をもっていることをといている。このような二分法は、日本人や日本社会を理解する上で分かりやすく、明快なものである。また、Sumner (1979)の in-group と out-group という分け方にもみられるように、他社会とも比較できる普遍性をもった区分法であろう。しかし、「内」・「外」の枠組みにはいくつかの問題点を指摘することができる。例えば、図1には自己がどこにも示されていない。自己がどこに位置するのかが分からなければ、「内」や「外」がどのようにひろがっているのかを認識することはできないであろう。日本人の自己がときにはまわりの「内」と同化する現象はあっても、自己はあるはずである。また、前述したように、「内」が自己の身近な人間を意味するならば、「外」はそれ以外の人間を全部含むカテゴリーと考えていいものであろうか。例えば、サラリーマンにとって取引先の会社の人間が「外」であると同じように、満員の通勤電車の中にいる人間たちが「外」であるとは考えられないし、同じような態度や言語行動をとるともいえない。「内」・「外」の二分法では、言語行動全般を考えるには足りないといえよう。

2. 日本人の人格構造

「内」・「外」の枠組みと関連して、日本人の自己認識や人格構造をモデル化しようとした一連の比較研究がある。國廣(1973)は、日米の言語行動の特色の差は人格構造の差に由来するのではな

いかと考え、図3のように日米の人格構造の相違を仮定した。日米を比較すると、社交層が日本人では薄く、アメリカ人では厚い。社交層とは、「他人とつき合う際に相手が踏み込んでくるのを許す範囲」（國廣 1973：26-7）である。社会層が厚いアメリカ人はしたがって、社交性が強く、初対面でもとっつきやすく、個人的事柄でも気安く未知の人に話すなどの特徴がみられる。いっぽう、日本人は比較的、その反対の傾向を多くもつといえる。また、日本人は自己を包む殻が薄いために傷つき易く、それがどぎつい表現を避け、間接的な柔らかい表現を用いるという日本人の傾向をもたらすのではないかと述べている。しかし、人格構造が自己と社交層に2分されるという説明は明快ではあるが、言語行動を説明する上ではより詳細な説明を加える必要があると思われる。

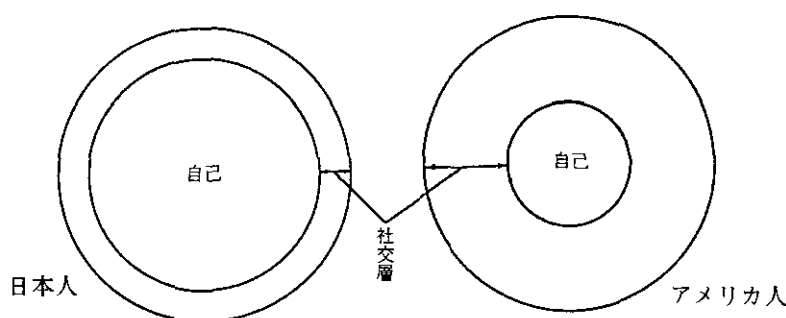


図3. 日本人とアメリカ人の性格（國廣 1973 より）

これに似た論議は Barnlund (1975)にもみられる。Barnlund は自己が私的自己と公的自己に分かれているとし、日本人が自覚する自己の範囲がアメリカ人のそれと違うために起こるコミュニケーション上の問題を明らかにしようとした（図4）。

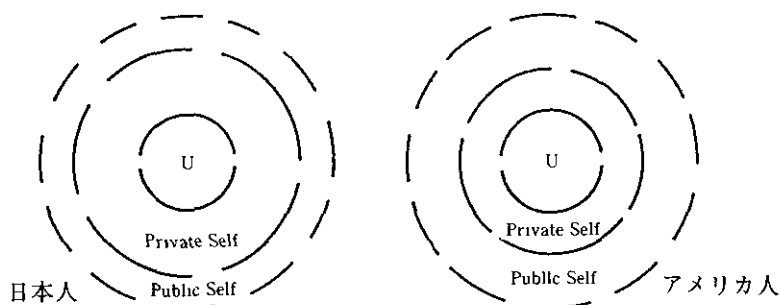


図4. 公的自己と私的自己（Barnlund 1975 より）

この図の中心にあるUは無意識の部分を含む「自己」の核であり、人からは侵されない領域である。それを囲んでPrivate Self（私的自己）とPublic Self（公的自己）が広がっている。私的自己は親密な関係のまわりの人とはコミュニケーションが成り立つ領域で、公的自己は、“aspects of person that are readily available and easily shared with others.”（Barnlund 1975:33）とあり、プライベートではない公的な会話ができる領域と解することができる。日本人とアメリカ人を比較すると、日本人は私的自己の領域が広く、公的自己の領域が狭い。いっぽう、アメリカ人は私的自己の領域が狭く、公的自己の領域が広い。他人と親しく交わることを肯定する気持ちが強い。このような特性をもつ両者が交わったとき、日本人が日本型のコミュニケーションを押し付けると、アメリカ人は日本人に対して「冷たい」、「他人行儀」、「形式主義」、「遠回し」といった判断をしがちになる。いっぽう、アメリカ人がアメリカ型のコミュニケーションを押し付けると、日本人はアメリカ人に対して「なれなれしい」、「大げさ」、「繊細さに欠ける」、「ずうずうしい」といった評価をしがちになることが考えられるという。國廣(1973)の「自己」はBarnlund (1975)の「私的自己」にはほぼ匹敵し、「社交層」は“公的自己”にはほぼ相当するとみられる。しかし、Barnlundは無意識部分を含む「自己」=Uを同心円の中心におくことで、人からは侵されない領域を設け、自己を3層に分けたことになる。

いっぽう井出(1977)では、日本人の人格構造がより綿密にアメリカ人のそれと比較されている(図5)。ここでは、國廣(1973)やBarnlund (1975)のように自己を私的部分か公的部分に分けるのではなく、人格構造が自己と社会の関連によって語られている。換言すれば、「内」・「外」の観点から述べられているといえよう。したがって、この図では自己がそのまわりの人間をどのように捉えているかに焦点がある。

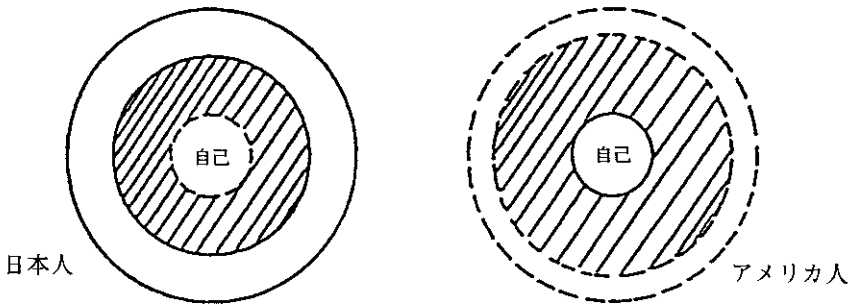


図5. 日本人とアメリカ人の人格構造（井出 1977 より）

自己のまわりの円（斜線部分）は日本人では狭く、アメリカ人では広い。日本人は「内」の関係でつき合える人間が少なく、アメリカ人では多いことになる。そしてその外円である「外」の層は、日本人が広く、アメリカ人が狭い。つまり、日本人は心的距離をおいてつき合いたい相手が多く、ア

アメリカ人は比較的少ないことになる。この図は Barnlund (1975) と同じように 3 層の同心円であるにもかかわらず、2 番目の層の厚みがまったく反対になっている。これは、Barnlund (1975) が描いた円があくまでも人間の人格構造に焦点をおいているためで、自己がどの程度他者の進入を許すかを問題にしている。したがって日本人は公的に会話のできる自己の部分が少なくなっている。いっぽう井出 (1977) は、自分以外の世界を自己にどの程度近いか遠いかで類別しているかに焦点がある。したがって、図 5 では自己に近い親密な層がアメリカ人より狭くなっている。すなわち、視点の違いはあれ、3 者の論文において、日米の相違に関して同じような結論を引き出しているといえよう。井出の図の日本人の同心円は本稿で提示したウチ・ソト・ヨソの図 (図 2) と類似している³⁾。しかし、井出論文中には本稿で定義したヨソとみなされるべき人間層の指摘があるものの、ヨソの層は図示されていない。

このほかにも、「内」・「外」に関連した議論はさまざまな研究領域でなされ枚挙にいとまがないが、とりわけ比較言語や文化の観点からは有益な示唆を含んでいる。しかし、ヨソの層に対する注意はあまり払われていないし、ヨソの部分を含んだ日本人のコミュニケーションパターンがこれまで言語的焦点になった例は寡聞にして知らない。そこで次節では、なぜヨソの層にも注意を向ける必要があるのかについて述べる。

3. ウチ・ソト・ヨソの意識

筆者は、日本語の「感謝」と「詫び」の関連性について研究してきたが、この研究において、「すみません」などを代表とする詫び表現が、感謝やあいさつとして多用される実態をみた。そして、この傾向は被験者 (大学生を中心とする青年層) の相手が指導教官 (特に緊密ではないが関連があり (ソト) 目上の関係) のとき、著しく増大することが明らかになった (三宅 1993, 1994)。このような知見は、井出・他 (1986) の結果からも得られる。この研究は、「ベンを借りる」という依頼行為において、依頼する相手によって待遇度と言語表現にどのような変化が現れるかを調べたものであるが、それによると、「相手が指導教官の時もっとも改まった態度で接する」ことが明らかになり、しかも「依頼内容の重さと相手の違いとを比べると、相手の違いの方が丁寧さの変化の強い要因になっている」という。このように、ソトの人間に対して日本人は、きわめて敏感で注意深い待遇をしたり言語表現を使ったりする。ところが、ヨソの人間に対してはこのような傾向はみられないのである。三宅 (1993) の感謝と詫びに関する調査にそって述べると、ヨソの人間に対しては、ウチの人間よりも感謝やあいさつを意味する詫び表現が多くはなるが、ソトの人間とは比べものにならないほど少ないという結果が出た。いっぽう、井出・他 (1986) の調査結果からヨソのカテゴリーといえる人間を抽出してみたところ、このような人間に対して被験者は、丁寧度のスケールでいうと中程度の待遇をし、表現の丁寧度でも中程度のものを使うことが分かった。この 2 つの調査から、ヨソのカテゴリーの人間に対して、日本人はウチともソトとも違った対応をすることが示唆されたといえよう。

いっぽう、心理学、精神分析の分野の研究に眼を向けると、やはりソトとヨソのカテゴリーを別々にもうけて考える論拠をみることができる。この分野の研究では、しばしば日本人の対人恐怖症の特殊性が問題にされてきた。欧米人に比べて日本人は対人恐怖症が圧倒的に多いが、そのなかでも、相手が特に緊密ではないが関連がある「半知り」(笠原 1977)のとき、その傾向が著しいという。中山(1988)は日本人の人間関係をウチ・ソト・ヨソに分け、「半知り」の相手をソトの関係とした。この分類を参考に、日本人の言語行動に即して構成してみたのが図2であった。本節ではさらに、この図を使い、英米人の自己対社会観をウチ・ソト・ヨソの枠組みで想定し、日本人のものと比較してみることにする(図6)。このような比較によって、日本人の特性をより鮮明にとらえることができると思うからである⁴⁾。

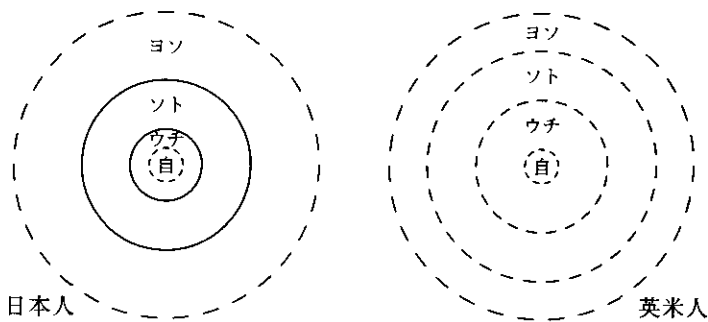


図6. ウチ・ソト・ヨソモデル(日・英米比較)

まず、日本人の図を見てみよう。前述したように、ウチは親や兄弟のようなきわめて自己に近い関係の人間のいる層である。自己とウチの境界は点線で示されているように、時に曖昧となる。ウチの外円にはソト、大学の指導教官や会社の上司のような自己と関連のある人間群である。ウチとソトの境界はハッキリと線が引かれる。もちろん、この境界は状況によって収縮する。例えば、会社の上司のように、直接話す時は高い丁寧度の言語表現を使う相手でも、外部の人間に対しては、ウチの人間として謙譲語を使う対象となる。このソトの外円がヨソである。この領域はふだんは自己と関係のない人間群で構成されている。通りがかりに道を聞かれたり、電車の中で足を踏んだなどで一時的に関連をもつような相手で、相手に関する情報は極めて少ない。また、自分がどのように思われようがあまり支障がない相手でもある。このような相手に対しては、日本人は極めて冷淡で気配りのない行動をとることも多い。例えば、取引先の人間には丁寧で気配りを尽くす社員が、仕事を終って電車に乗ると、高いびきをかいて周りに迷惑をかけたり、鼻くそを平気でとり続ける不躰さは、このようなヨソ意識からくるものであろう。「礼儀正しく丁寧」とステレオタイプ的にいわれる日本人が、外国人からひんしゅくをかい、不信感を抱かせるような場面でもある。したがって、ソトとこのヨソとの境界も、実線で描かれるべきハッキリしたものがある。しかし、相手の情

報が多くなり、自分との関連ができると、この境界線も収縮してヨソの人間はソトへと繰り込まれる。団地のエレベータで挨拶もしなかったような人が、子供の小学校が同じことに気づいて急に丁寧になったりする例などである。

次に、同じ枠組みを使った英米人の図を見てみよう。ウチ・ソト・ヨソの層の幅は日本人のものとは違う。中心の自己は、まわりのウチとははっきりした線で区切られている。親しい仲間や家族間でも、自己の内面に関しては、一線をかくす文化である。そのまわりのウチは日本人の層よりも広く、ソトとの境界もはっきりしないような柔軟性のある層である。ソトとヨソの境界もはっきりしたものではないと思われる。このような環境では、ソト層の人間をウチ層の人間のように待遇することが、'politeness'につながることが多い。また、ヨソ層の人間をソト層に引き込もうとする傾向も強い。英米人が初対面でも、なるべく早いうちファーストネームで呼び合おうとする傾向は、ソトからウチの関係へと引き込むことをよしとする規範からであり、まったく知らない人にでも気楽に声をかけたり冗談を言ったりする傾向も、ヨソとソトとの境界が弱いものであることを示している。'politeness'の観点から付言すれば、日本人の「丁寧さ」は、ソト層の人間をウチ層の人間と区別する待遇や言語表現をすることで実現されることが多いといえよう。

4. ヨソに関する研究の方向性

前述した井出・他(1986)の「ベンを借りる」という依頼行為についてももう少しわしく考えてみたい。この言語調査では、20種類の人間に対してどのような丁寧度で待遇するか、また、どのような丁寧度の言葉を使うかを調べているが、本稿のヨソの層に相当するカテゴリーの人間は、待遇度のスケールでいえば、高位置（教授のようなソトで目上のカテゴリー）と、低位置（親友や家族のようなウチのカテゴリー）の中間の層を形成している。また、丁寧度の違う表現の使い分けに関しても、おおむね中間位置を占めている。ウチやソトに比べて心理的距離からいえばいちばん遠い位置にあるヨソの人間に対して、待遇度と言語表現はウチとソトに対するものの中間に位置するのである。一般に、たいへん大まかな言い方をすれば、ウチの人間には自己と近いため敬意を示す必要が少ない（非丁寧）が、ソトの人間には自己と距離があるため、円滑なコミュニケーションを行うためには敬意を払う必要がある（丁寧）と考えられてきた。距離がいちばん離れている人間に対して、丁寧度が中間である現象は、どのように説明されるべきであろうか。これに答えるため、自己からみてヨソの人間が根本的にもつと思われる2つの要素を考えた。

- 1) 不確実性 (uncertainty)
- 2) 無関心 (indifference)

1)の「不確実性」は、自己の視点からみれば、ヨソの人間に関しては情報がきわめて少ないことをさす。見かけや状況からどのような人間であるかを判断して行動するしかない。反対に、見られ

る側の自己にとっても、その場限りの情報で判断されてしまうという不確実性からくる不安がある。2)の「無関心」は、かりにヨソの人間と突発的になんらかのコミュニケーションが成立しても、一時的なもので、これからも関係がないだろうという意識をさす。これらの要素をもったヨソの人間に対して、日本人はどのような行動をとるかを考えてみよう。「不確実性」を強く感じる場合には、ヨソの人間に対して比較的丁寧な待遇したり丁寧な表現をするという安全な方略を使うことが考えられる。また、早くヨソからソトのカテゴリーに引き込もうとする傾向も考えられる。例えば、外国人がしばしば不服をいうことだが、なにかのきっかけで会った日本人にすぐに個人的なことを根ほり葉ほり聞かれる（年齢、仕事、出身地、結婚しているかなど）ことなどはいい例であろう。早く情報を得て相手をカテゴリー化し、位置づけをしようという方略のひとつと考えられる。また、見られる側としての自己からいえば、自己を上品にみせる美化的効果をもった丁寧な待遇や表現を選ぶことも考えられよう。誰に対してもいつも丁寧という人もいる（内省では、このような傾向は女性に多いように思われる）。あるいは、ヨソの人間の視線と思惑が気になって、人前で素直にバスの席が譲れない、困っている人に声かけられない、などの現象（学生の談話による）もみられる。井出・他(1986)調査の結果で待遇度と待遇表現が中程度という結果が出たのは、依頼行為という、ヨソの人間とやむなく「借り」の関係をつくる場面性を考えたとき、「不確実性」に対する安全性の方略をとった結果と考えられる。

いっぽう、「無関心」の気持ちが強いと、どう評価されようと自分には影響がないので、不躰で、迷惑を考えない態度につながる。前述した会社員の電車での高いびきや、立っている人もいるような電車の中で、二人分ぐらいの席を占領して平気な態度、ポルノ本を堂々と広げて読む姿などはいい例であろう（内省では、このような傾向は男性に多いように思われる）。また、無関心のままで関係を終わりたいといった傾向も観察される。

ヨソの層とのコミュニケーションには、一般的に、自己の自覚が伴わないことが多いと思われる。それが、これまで研究の対象として省みられなかった理由のひとつであろうが、このような領域を研究するには、アンケート調査のような内省を頼りにする種類の研究は不向きであろう。このような研究には、できるだけ自然な環境のなかで得られたデータを分析することが必須である。

今後の研究の課題として、考察に必要な観点を述べると、まず、1)ヨソ意識は人によって違いがある。2)ヨソの人間に対してどのような意識をもつか、と、どのような表現を使うか、は切り離して考察すべきものである、ということがいえよう。データが得られる可能性のある状況としては、セールスマンや宗教の勧誘などの会話におけるディスコースの分析、通行人に道を聞く、きっかけをつくって話しかける、レストランや切符売り場でサービスを受けた後の客の反応調査などが考えられる。状況設定や分析をする際、恩恵を受ける側と恩恵を与える側がどちらであるかなど、どのような要因が存在するかを認識しておくことが必要である。

5. まとめ

本稿は、日本人の言語行動を考察する枠組みとして、ウチ・ソト・ヨソの概念を提唱した。従来の「内」・「外」の枠組みでは扱われなかったか、曖昧に処理されてきた「自己とはふだん関係がないがなんらかのきっかけで一時的に関係をもつ種類の人間」のいる領域をヨソとし、このような人間に対する言語行動にも、日本人の特徴がみられることを明らかにした。また、このような自己とヨソの関係を研究する社会言語学的調査の可能性を考えた。そして、ヨソの人間がもつ基本的要素として、「不確実性」と「無関心」を仮説として設定したが、この仮説をもとに自己-ヨソのインターアクションがみられる状況での調査・研究を進めていくことが、今後の課題である。

注

- 1) 本稿で定義したウチ・ソト・ヨソとの混乱を避けるため、従来からの定義で使う場合は「内」・「外」と表記する。なお、日本語教育方法研究会の第1回研究会（1993年9月23日）発表において、大坪一夫氏より「内」・「外」の用語がin-groupとout-groupの翻訳であり、日本人は「外」という言葉を日常的に使わない、従って日本語の使われ方を説明するには適切ではない、という旨の御指摘をいただいた。本稿のウチ・ソト・ヨソの用語が「内」・「外」の影響を受けていることを考えるとき、ウチ・ソト・ヨソという区分には紛らわしさが残り、用語としては避けるべきものなのかも知れない。しかし、現在のところ、それに代わる適切な用語が見つからないため、暫定的にウチ・ソト・ヨソを使いたい。
- 2) 土居(1975)、Lebra(1976)、Buchnik(1992)などにも類似した指摘がある。
- 3) 本稿のウチ・ソト・ヨソの図は、独自に構想をたてていたものだが、井出(1977)をはじめ國廣(1973)およびBarnlund(1975)の図も参考にした。
- 4) 英米人を同列にして述べることに疑問があろう。おのおのの言語行動に多少の相違があることは、筆者の観察や調査(三宅 1992)などでも明かであるが、この図のような日本人との対比においては、おおむね同じように論じられると考えた。また、日本社会からみた枠組みであるウチ・ソト・ヨソを英米世界に当てはめてみることに異論があろう。しかし、本稿で示したウチ・ソト・ヨソの定義にかなった人間の層は、英米にも存在するはずである。

参考文献

1. 井出祥子(1977)「英語敬語の理解と翻訳」『英語文学世界』1月号 英潮社
2. 井出祥子・他(1986)『日本人とアメリカ人の敬語行動』 南雲堂
3. 笠原嘉(1977)『青年期』 中公新書
4. 國廣哲弥(1973)「言語の統合的モデル」『国語学』92集 国語学会
5. 土居健男(1975)『「甘え」の構造』 弘文堂
6. 中山治(1988)『「ほかし」の心理』 創元社

7. 平林周祐・浜由美子(1988)『外国人のための日本語例文・問題シリーズ10 敬語』 荒竹出版
8. 三宅和子(1992)「<感謝>と<詫び>にみるアメリカ人とイギリス人の言語行動」『言語行動論報告2』 荻野綱男編・発行
9. 三宅和子(1993)「感謝の意味で使われる詫び表現の選択メカニズム」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第8号 筑波大学
10. 三宅和子(1994)「「詫び」以外で使われる詫び表現—その多用化の実態とウチ・ソト・ヨソの関係—」『日本語教育』82号 日本語教育学会
11. Barnlund, D. C. (1975) *Public and Private Self in Japan and the United States*, Tokyo : Simul Press.
12. Benedict, Ruth (1946) *The Chrysanthemum and the Sward*, New York : Houghton Mifflin.
13. Buchnik, Jane (1992) *Family, Self and Society in Modern Japan*, Stanford, Calif. : Stanford University Press.
14. Lebra, Takie Sugiyama (1976) *Japanese Patterns of Behavior*, University of Hawaii Press.
15. Sumner, William (1979) *Folkways and Mores*, New York . Schocken.